俳句の世界

大岡信
川崎展宏

句の世界

大岡信
川崎展宏

富士見書房

俳句の世界

昭和六十三年七月二十日　初版発行

著者　大岡信
発行者　川崎展宏
印刷者　牧野一
製本者　中内康児
発行所　株式会社　鈴木俊一　富士見書房

東京都千代田区富士見一ノ十二ノ十四
〒一〇二　振替　東京　七—八六〇四四
電話　編集部(〇三)二二二二—一五四二
営業部(〇三)二六一—五三七五

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替え致します。
ISBN4-8291-7052-2　C0095

目次

はじめに――この本の周囲のこと　大岡信　五
宏壮と優美・子規再見　一三
巨いなる随順・高浜虚子　四五
女流俳句の世界　七七
阿波野青畝の世界　一〇九
即物写生と感覚写生――朱鳥・鶏二・泰――　一三五
伝統への去就――渡辺白泉・富沢赤黄男――　一六二
花鳥諷詠の器量　一九二
俳句の円熟――誓子・楸邨の近業――　二二五
花鳥の本意　二五八
おわりに　川崎展宏　二九五

装画　須田剋太
装丁　熊谷博人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

俳句の世界

はじめに——この本の周囲のこと

大岡　信

九か月もの間、毎月一回定期的に同じ相手と会い、対話を続ける——そんな経験は私にとって初めてのことだった。もし相手との間にたえず意見の衝突があるとしたら、これは長い陰鬱な行事になるだろう。またもし相手との間に意見の一致ばかりがあるとしたら、これまた同じことになるだろう。

川崎展宏との対話は幸いにしてそのどちらでもなかった。逆に、私は毎回新しい刺戟への期待をもって対話の場へ臨み、毎回何らかの意味で満ち足りた思いを彼と分かち合って帰途についた。対話のために特別の準備を一所懸命したということはなかった。むしろ、彼との対話を通じてごく自然に私自身の中に湧きあがってくる想念の流れを、できるだけ忠実に追いながら、対象となっている俳人の仕事なり思想なりと私の想念との接触面をたえず押し広げてゆくことに専念した。

このように書くと、ずいぶん自分勝手な態度で川崎氏と向かい合っていたように受け取られかねないが、そうではない。川崎氏は、私が私自身の想念をできるだけのびのび追跡できるように、二人の対話をリードしてくれたからである。私はむしろ自分の想念の行方を自由に追うことが、

彼の友情に応える最も望ましい道であることを感じていたから、そのようにさせてもらった。その結果、全九回の対話は、少なくとも私にとっては、毎度出かけてゆくのが楽しい語らいの場となり、話の弾み具合で私たちは、言葉そのもの、また俳句という詩型のもつ、不可思議な霊泉の息吹きに感嘆しつつ触れているという実感をしばしばいだくことができたと思う。

この九つの章にわかれた近代・現代俳句俳人論は、全体の骨組みも扱うべき対象も、言うまでもなく川崎氏と私との合議によって選択され、構成されているが、その点についていえば、私が参加したのはそこまで。こまかなことの一切は川崎氏が準備し、お膳立てし、さあこれを飲んだり食ったりしてみようと、対話の当日私の前へ素材を並べてくれるのが常だった。私にはそういう準備をするだけの十分な時間も、また知識もなかったから、ただ出かけていって、テンコウさんが投げこんでくるボールをせいぜい一所懸命打ち返すことに専念していればよいという次第だった。

言いかえれば、私は俳句の実作者ではない立場の人間として、ただし広く深い「詩」という霊妙な命の洗濯場に一緒にわが身をさらしている人間として、眼前に並べられる俳句作品を出発点として、詩のひろびろとした天地（あめつち）にどこまで閑々と遊べるかという試験を、わが身に課そうとしたのだった。下調べのようなものは、最小限必要なこと以外は一切しないで行こうと決めていたのもそのためである。

もし扱う対象にそれだけの力と美があるのならば、下調べなどしなくても、私たちはその力と

美にじかにうたれて、言葉をうめき出すことができるはずである。今日の詩歌文芸の世界の病弊の一つは、そのような信仰が地を払いつつあるところにあるだろう。いいものは出会いがしらに私たちをうつ。その経験の蓄積と継承が詩歌の真実の歴史を刻む。今はそのような単純率直な真実が忘れられようとしている時代だから——しかし、忘れたかわりに何か別のものを得たというのか、そんなものは何もありはしなかった——歴史というものの豊饒さも、私たちには猫に小判となりはてている。

川崎展宏と私の対話が友人同士の対話であることについて、多少説明しておいた方がいいかもしれない。川崎氏と私は同じ大学の同じ学科の同級生だった。ただし私は怠惰な学生だったため、彼と本当の意味で知合ったのは大学を出てしばらくしてからのことである。米沢の女子大の教師をしていた彼が、ある時とつぜん手紙をくれて、その時はじめて私たちは単なる同級生ではなく、友人になった。

その後有為転変があって、奇縁から彼は私の勤めていた大学の、同じ学部の同じ学科の教師となった。つまり年がら年中生活を共にする最も親しい関係の同僚となった。私は昨年そこを退職したが、この対話は私の退職直前の時期から直後の時期にまたがって行われたわけで、私は退職後も毎月一度はテンコウ（というのが彼の俳名であり、愛称でもある）と会って話ができるのを心待ちにする喜びをもてたのだった。

私は以前、川崎氏がまだ『葛の葉』一冊しか出していない時期に、彼について「『遊び』の内景」

と題する小文をものしたことがある。『現代俳句全集』（立風書房）という、私も編集に参加した全集の川崎展宏篇のためのものだった。それは少なくとも私にとっては多少ましと思える俳人論の一つだった。対話の相手について私がどのような認識を持っているかを本書の読者に知って頂く便宜を思って、そこから少々自己引用させてもらおうと思う。悪しからずご了承ください。

川崎展宏が今までに出した句集は『葛の葉』一冊である。この句集には昭和三十年から四十七年まで、十八年間の作が収められている。よほど厳選したものにちがいない。句数は三百に満たない。その数少ない句を集めて編んだ句集の最後に、彼は「跋」を書いた。たった三行。

「俳句は遊びだと思っている。余技という意味ではない。いってみれば、その他一切は余技である。遊びだから息苦しい作品はいけない。難しいことだ。巧拙は才能のいたすところ、もはやどうにもならぬものと観念するようになった。」

大した覚悟である。彼がここで言っている「俳句は遊び」という高尚で健気な思想を、今日の俳人のいったいどれほどの人数が理解し、諾うであろうか。現代詩人については言うも愚かであろう。「余技という意味ではない。いってみれば、その他一切は余技である」とわざわざ念を押してはいるけれど、展宏の句は遊びだそうな、しからばすなわち余技ならん、と脳中余裕とぼしい回路が短絡（ショート）して火花を散らす人々もいるだろう。川崎展宏という俳人の真正直な向う気の強さが、この跋文にありありと出ている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

川崎展宏の言っていることは、詩歌のたしなみを「風月延年の飾り」と言った世阿弥の言葉と、格別ちがった意味のことではなかった。彼はおそらく、虚子の句に傾倒すること久しかった期間に、虚子の言う「花鳥諷詠」のこころを、彼自身の言葉で「遊び」と鋳直したのではないかと思われる節があるが、「遊び」という言葉にまで自分の句観を責めあげ締めあげてゆく間に、彼は「その他一切は余技」という切羽つまって厳しい考えを、幾たび反芻したことだろうか。反芻を重ねているうちに、この逃げも隠れもできないあまりにも真正直な考えは、とうとう展宏の玄関口からあがりこんで座敷に腕組みして、「一杯やろうか」と微笑しながら坐っていた。

（中略）

彼は米沢から、ある時とつぜん私に手紙をくれた。私の書いたものにふれての手紙だった。大学を出てまもないころ、私の詩を読んだことについての、こちらの胸が熱くなるような思い出話も書かれていた。私たちは正確にはその時以来の付合いということになる。しかしそれは時折の文通にとどまっていて、私が「あ、あれが川崎か」と認識したのは、彼が東京の女子大に転勤してきて、所沢に居を構えてから暫くしたころのことである。金子兜太の句集の出版記念会が市ヶ谷で行われて、宴たけなわからやや頽れ、座が騒然となりはじめた頃、顔を蒼くして、細い体のくせによく響く大声で、何やら兜太を難じつつ正論を怒鳴っている男がいる。私には正論ときこえたが、一座の空気はどうやら反対側に傾いていて、顔面蒼白の男は暗夜に月

を呼んで吠える孤岩の上の孤犬のごとく見えた。それが展宏を、ほんとの意味では初めて見た日であった。

ひょんなことから私と同じところへ勤務先を変えたこの人物は、教授会の重くるしい議論の真最中でも、隣の私に近作の句を見せては意見を求め、熱してくるや持前のよく響く声を思わず高めてしまうという癖をみせて、なるほど、「いってみれば、その他一切は余技である」にちがいなかった。まったく、この男から俳句三昧の習性を取除いたら何があとに残るのだろう。この男が酒を飲んで大声を発するとき、俳句がそこで怒鳴っている感じがする。風狂とは、こういう必死の遊びにほかならなかった。

（中略）

感覚の鋭敏。語感の清冽。対象をとらえるときの全身的集中と、それを表現する言葉の厳しい抑制との、作者内部におけるみごとなコントロール。一言で尽せば、デリカシーという語が生きて歩いているのが、川崎展宏の句の世界にほかならない。

このようなわけで、川崎氏との対話は、互いにごく親しい友人同士である者の対話だったが、全九回を通して二人のあいだで話題になったことはすべて、それ以前には一度も二人が話し合ったことのない話題ばかりだった。おかげで一回二時間前後の会話は終始快い緊張の連続となった。今まで俳句界で論じられたことのない方向からの対象へのせまり方もいくつかあったと思う。そ

ここには私の不行届きで間違っている点もあるかもしれないが、その場合でさえ、少なくともここには考えるに値する問題点の指摘だけはある、といえる程度の真剣な接近の努力はあったと自信をもって言うことができる。うなずいて読んでくださる人の一人でも多からんことを願っている。

昭和六十三年五月

宏壮と優美・子規再見

虚子から子規へ

川崎　静かな虚子ブームというか、虚子虚子という声がこのところ続いているけれども、やはり子規の志といったものを、もう一度考え直す必要があるんじゃないか。虚子は八十五歳まで生きているから、若い人がいきなり虚子の晩年を表面的に真似るようなことをすれば、どこかおかしくなるでしょう。

大岡　そうでしょうね。

川崎　そこで子規の志に触れながら、子規を見直していくのは、いま、大事なことに思えるんだけど、子規の評論における志、それに対して三十何歳で一つの完成を示した「いくたびも雪の深さを尋ねけり」、まあ、いわば写生を突きぬけた作品。

こうした、子規の晩年の世界は「空気充満し物々生動す」といった、洋画に開眼した頃の評論の立場とちょっと違ってきている。その違うあたり。

いまから見ても、たしかに時代にマッチした数々の評論の方向と、最晩年の草花への愛着にみられる無垢なものと、そのへんのギャップみたいなところを押さえていったらどうか。

大岡　俳句の問題としては、そのことが一番大きいでしょうね。

川崎　そこをまずやってみると、何か出てくるかもしれない、と。

大岡　ぼくはいつも不思議に思っているんですけれども、正岡子規の俳句は、俳壇の人たちが認めないほど悪いものじゃない。俳壇では子規の俳句について正面切って誉める人、あまりいないでしょう。虚子ならば、誰でも誉めればいいというような風潮があって、これがはなはだ気に入らない（笑）。

川崎　対談を読むのはみな実作者だからね。これは、作者たちに対する一つの……。

大岡　恫喝――（笑）。

川崎　それもほしいということなんだな、きょうは。

大岡　虚子はたいへんな作者です。だけれども、虚子のものならなんでも誉めてもいいというような風潮が、ここ十数年出てきていると思ってね。ぼくは、虚子に対して非常な敬意を持っているだけに、それではまたまたつるんとした虚子になってしまうんじゃないかという恐れを感じていますね。

これは理論面だけれども、子規が言った、『古今集』はくだらない集で、貫之は下手な歌人で、また芭蕉は蕪村に比べればあんまり秀句はなかったんじゃないかと、ある時期子規はそう言った。それがだいたい鵜のみにされていくという傾向がずっとあったわけですね。

特に歌のほうで言うと、『歌よみに与ふる書』で、強烈な、古典主義和歌に対する否定を彼はやった。それは時代の要請という面が非常にあったわけで、正岡子規という人は、そういう時代の空気を実に敏感に受けとめて、それを精密に作られた大砲で敵を撃つみたいな形で、最大の難敵を砲撃して、あっという間に『古今集』とか貫之が色褪せるくらいにやったわけですね。

それはそれで、彼の立場はよく分かるんだけど、それが鵜のみにされてきたために、後世が被った被害は非常に大きいわけです。しかしそれは子規が悪いんじゃなくて、学者を含めて、子規を鵜のみ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook